



Title	「瀟湘八景」の伝来に関する新知見：平安時代における瀟湘イメージを中心に
Author(s)	武, 瀟瀟
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 64-65
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/65022">https://doi.org/10.18910/65022</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「瀟湘八景」の伝来に関する新知見 — 平安時代における瀟湘イメージを中心に

武 瀟瀟／京都工芸繊維大学

「瀟湘八景」とは13世紀に日本に伝来した中国の水墨山水画の画題であり、文献と遺品から、15、16世紀に瀟湘八景を主題として夥しい数の絵画が制作され、大流行していた様子が窺える。

本発表は、日本の中世以降に流行する「瀟湘八景図」という主題の伝来について、日中の文学、美術に関する同時代の文献資料の分析を通して、従来とは異なる新しい見解を提出するものである。

本発表はまず、瀟湘八景が中国・湖南省の湘江と瀟水が合流するあたりにおける八つの景色とされているという通説について、日中の文学分野での先行研究を踏まえながら、再検討してみたい。結論を述べると、瀟湘は、瀟水と湘江の二つの川を指すというよりも、「清らかな湘江」を本意として、今の湖南省の南から北の洞庭湖に注ぐまでの湘江全流域を指すことといえる。

また、これまでの日本の瀟湘八景に関する研究は、瀟湘八景図が伝来して以降の、即ち中世以降の文献と作品にもとづいている。一方、中国における近年の研究では、中国では、瀟湘八景図についての考え方が成立する以前に、瀟湘地域は文化史上において、すでに重要な意味をもっていたことが指摘されている。

日本の平安時代の文献を調べた結果、中国におけるこの瀟湘地域に対するイメージは、いわゆる瀟湘八景図が広く受容される室町時代以前に日本に伝来しており、これまでの先行研究で指摘されているよりもかなり早くから日本で絵画化された可能性が高いことを指摘したい。

具体的には、まず、中国における瀟湘地域に関する文学的伝統を湘妃伝説からの離愁別恨（Aタイプ）と屈原（Bタイプ）からの貶謫帰隱という二種類に分類し、そして唐時代の題画詩から、この文学的伝統を反映する瀟湘地域の絵画が既に存在していたことを指摘する。

その上で、瀟湘地域の文学的伝統に関する言葉をキーワードとして、平安時代の文献を探る作業をし、詩文の主題によって、①閨怨（帰らぬ夫の帰りを待ちわびる女性の悲しみ、Aタイプ）、②謫居、帰隱（屈原と共感し、不遇、追放、旅愁などの感情を表し、或いは政治への不満を訴えるBタイプ）③詠物（湘妃伝説の斑竹の出典を借り、竹あるいは竹製品を詠うAタイプ）④悲秋：落葉、秋月、菊など秋の景物を詠う（A、Bタイプ）に分類した上で、瀟湘地域における悲劇的な神話伝説（Aタイプ）や屈原をはじめとする「政治的失意」、「追放」、「帰隱」といった文学的伝統を、日本と中国が共有していたことを明らかである。

次に、平安時代のテキストに記録された、《漁父詞屏風》、《坤元録屏風》、《和漢抄屏風》といった三つの作例から、A、B二つの文学的伝統に基づく絵画が存在し、瀟湘地域は平安時代にはすでに中国の名所として屏風絵に描かれていた可能性が高いことを指摘したい。

これらの指摘により、瀟湘八景が中世に日本に伝来し一気に大流行した背景には、実はその前の時代に文化的な土台が既に築かれていたということを明らかになった。

よって、本発表では、室町時代水墨画の定

型ともいえるいわゆる瀟湘八景図が伝来する以前の「瀟湘イメージ」の受容について紹介し、「瀟湘八景」の伝来についての日本における従来の見方の修正を試みたい。